

令和2年度 第2回富山市通学区域審議会 審議項目1及び2のとりまとめ

1 望ましい学校規模（学級数）

国の法令や、市民アンケート、児童生徒及び教職員アンケート、さらには第1回富山市通学区域審議会における意見を踏まえると、「**小学校は12学級～18学級（1学年2～3学級）**」、「**中学校は9学級～18学級（1学年3～6学級）**」が望ましい学校規模（適正規模）の考え方の一つ。

(1) 国の法令等

国の法令等で学校規模について定めがあるものは、次の3つ。

① 学校教育法施行規則第41条（中学校は準用）

小学校の学級数は**12学級以上18学級以下を標準**とする。ただし、地域の実態その他特別の事情があるときはこの限りではない。

② 義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令第4条

適正な学校規模は、学級数が、小学校及び中学校にあっては**おおむね12学級から18学級まで**であること。さらに5学級以下の学校と適正な規模の学校とを統合する場合には24学級までが適正な学校規模とする。

③ 公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引

小学校では、全学年でクラス替えを可能としたり、学習活動の特質に応じて学級を越えた集団を編制したり、同学年に複数教員を配置するためには**1学年2学級以上（12学級以上）**あることが望ましい。

中学校については、免許外指導をなくしたり、すべての授業で教科担任による学習指導を行ったりするためには、**少なくとも9学級以上を確保**することが望ましい。

④ 学校教育法施行規則第79条の3（義務教育学校の学級数）

義務教育学校の学級数は**18学級以上27学級以下を標準**とする。ただし、地域の実態その他特別の事情があるときはこの限りではない。

(2) 市の実施したアンケートの状況

① 市民アンケート

■ 問2-4「小学校では、1学年あたりどの程度の学級数が適切と思いますか。」

・2学級以上が望ましいと考えている市民は91.9%（2,032人）に上り、ほとんどの市民は複式学級や1学年1学級よりも複数学級で編制されているほうがよいという結果であった。



■ 問2-5「中学校では、1学年あたりどの程度の学級数が適切と思いますか。」

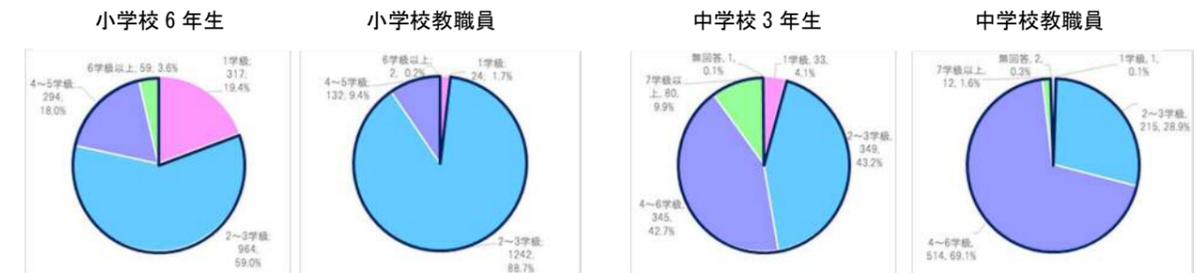
・「4学級以上が望ましい」と考えている市民は、69.4%（1,534人）であった。
 ・「2～3学級が望ましい」を含めると、95.5%（2,110人）であり、小学校同様、ほとんどの市民が複数学級の編制がよいという結果であった。



② 児童生徒及び教職員へのアンケート

■ 問2「あなたは、1学年に何学級あると、楽しく学習したり生活したりすることができますか。（小学校6年生・中学校3年生）」／「あなたが理想と思う、1学年当たりの学級数はいくつですか。（教職員）」

・小学校6年生では8割以上が、中学校3年生ではほとんどが「2学級以上が望ましい」という結果であった。
 ・教職員においては、小学校・中学校ともにほとんどが「2学級以上が望ましい」という結果であった。
 ・中学校教職員では、7割以上が「4～6学級が望ましい」という結果であった。



(3) 富山市通学区域審議会における意見

■ まずはどうやって質の高い教育を担保するかを考えていくべきで、小学校の複式学級はなるべく早く解消してあげる必要がある。
 ■ 学級数は多すぎても少なすぎても課題がある。また、質の高い教育を保障するため、1学年2学級以上は確保していく必要がある。
 ■ 教員の面からみても、複数学級であることは、教材研究や授業の質を高める上でも意義がある。
 ■ 中学校の場合、1学年に3～5学級あれば1人の教科担任がその学年だけを見ることができるが、それより少ない場合は複数の学年を見ることとなり、負担が増える。適正な学級数があった方が、現場の教員はありがたい。
 ■ 小規模校では教科によって、専門の免許を持っていない先生が教えるという、免許外指導が発生することがある。

2 望ましい学校規模（学級人数）

アンケートや審議会、国の動向を踏まえると、「**学級あたり 21 人以上が目標とする学級人数**」が考え方の一つ。

（1）県の学級編制基準

富山県学級編制基準における学級人数は、1 学級あたり 40 人以下（小学校 1 年生は 35 人以下）が上限。

富山県学級編制基準

区分	学級編制の基準
小学校	同学年の児童で編制する学級 40人 ※1年生は35人 ※2年生は、少人数学級の研究を行う学校において、35人 ※2年生、4年生、6年生において、子どもの減があっても前年度の学級を維持 ※3・4年生は、少人数学級の研究を行う学校において、35人（選択制）
中学校	同学年の生徒で編制する学級 40人 ※1年生は、少人数学級の研究を行う学校において、35人

複式学級編制基準

区分	1年生	2年生以上
小学校	2つの学年で8人以下	2つの学年で15人以下
中学校	2つの学年で8人以下	

（2）国の動向

経済財政運営と改革の基本方針 2020（令和 2 年 7 月 17 日閣議決定）によると、「学校の臨時休業等の緊急時においても、安全・安心な教育環境を確保しつつ、すべての子供たちの学びを保障するため、**少人数によるきめ細かな指導体制の計画的な整備や ICT の活用など、新しい時代の学びの環境の整備について関係者間で丁寧に検討する。**」とされている。

国の第 46 回・47 回教育再生実行会議では、「諸外国と比べても我が国の学級は大規模。**20 人程度、少なくとも上限 30 人という学級編制を早期に実現**することが、我が国の未来への投資という意味でも非常に大事。」という意見があった。

（3）児童生徒及び教員アンケート

- 問1「あなたは、1 学級に何人いると、楽しく学習したり生活したりすることができると思いますか。（小学校 6 年生・中学校 3 年生）」／「あなたが理想と思う、1 学級当たりの児童生徒数は何人ですか。（教職員）」
- ・小学校 6 年生では 6 割以上が、中学校 3 年生では 7 割以上が「21 人以上が望ましい」という結果であった。
- ・小学校教職員では 6 割以上、中学校教職員では 8 割以上が、「21 人以上が望ましい」という結果であった。



（4）富山市通学区域審議会における意見

- 40人学級では、コロナ禍において3密対策で苦勞していると聞く。30人学級を前提とした再編もやむを得ないのではないかと。
- 今の子どもたちは、多様な人間関係の中では自己表現ができない、ストレスを感じるという子どもが多く、適正配置を行う上で、どのように目が行き届くような教育環境を保障するか考えていく必要がある。複数学級も必要だが、そのような目が行き届く範囲の学級人数であることが必要ではないかと。
- 学年1学級のなかには、1学級10人以下もあれば、40人近くの学級もある。大規模校は少人数指導もできるが、小規模校は少人数指導しかできない。大規模校の課題は工夫することで解決することが可能なことも多いが、人数が少ない場合はなかなか解決できない。小規模校は解消したほうが良いと思う。

3 望ましい通学距離と通学時間

「徒歩では、子どもたちの歩く速度（時速4km程度）を考えると、**通学距離は2～3km、通学時間は30～40分以内**を目安とする」が考え方の一つ。
 また、「**自転車・スクールバス・公共交通機関を利用した場合は、自宅から学校までおおむね1時間以内を通学時間の目安とする**」が考え方の一つ。

(1) 国の目安

国においては、通学距離は、義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令第4条で定めがあり、通学時間については公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引に目安として提示されている。

学校	通学距離	通学時間
小学校	原則 4 km以内	適切な通学手段を確保することで、おおむね 1 時間以内とする。
中学校	原則 6 km以内	

(2) 市民アンケート

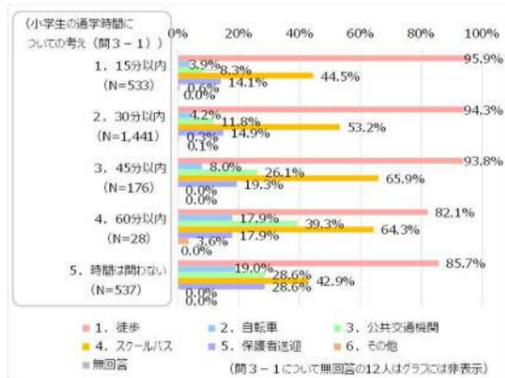
■ 問3-1「小学生の片道の通学時間はどれくらいまでが許容範囲だと思いますか。」

・30分以内が65.2%（1,441人）と最も多く、次いで15分以内が24.1%（533人）という結果であった



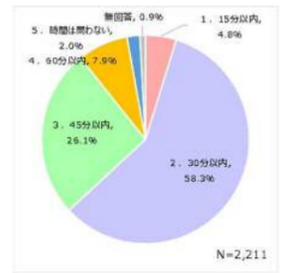
■ 問3-1と問3-2（「小学生の通学方法として、どのような方法が望ましいと思いますか。」）とのクロス集計

・問3-1で「30分以内」と答えた人のうち、徒歩がよいと答えが最も多く、次いで、スクールバスが良いという回答であった。
 ・全体として、どの時間においても徒歩という選択が多く、次いでスクールバスという結果であった。



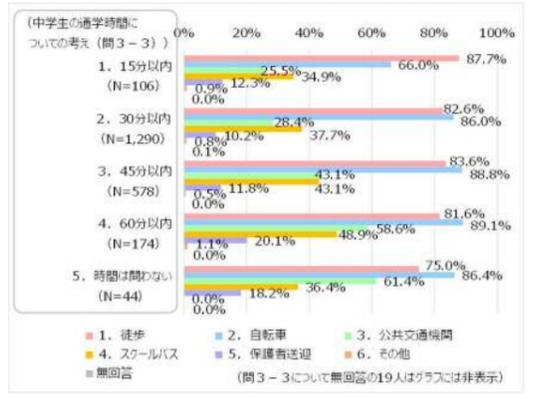
■ 問3-3「中学生の片道の通学時間はどれくらいまでが許容範囲だと思いますか。」

・30分以内が58.3%（1,290人）と最も多く、次いで45分以内が26.1%（578人）という結果であった。



■ 問3-3と問3-4（「小学生の通学方法として、どのような方法が望ましいと思いますか。」）とのクロス集計

・30分以内と答えた人のうち、自転車が良いと答えが最も多く、次いで、徒歩が良いという回答であった。
 ・全体として、15分を超過したときに自転車を選択する人が多く、次いで徒歩という結果であった。



(3) 文部科学省の研究

■ 平成20年度文部科学省新教育システム開発プログラム事業「通学制限に係わる児童生徒の心身の負担に関する調査研究」（東京学芸大学）によると、気象条件の影響が少ない場合にはあるが、「**通学距離に関しては、小学校5年生においては徒歩4km、中学校2年生においては6km以上になると、通学負担やクラブ・部活動などによるストレスが増加し、通学時間に関しては、中学校2年生においては40分以上の自転車・バス通学になるとストレスが増加する**」と報告されている。

■ 平成31年度「少子化・人口減少社会に対応した活力ある学校教育推進事業」において作成された「小中学生の生活、健康・体力、学習に通学手段・時間が及ぼす影響一発達段階別比較」報告書（令和2年3月10日東京学芸大学）によると、「**小学校5・6年生については、学校外での勉強時間や塾・家庭教師の利用状況、学習に向かう態度、教科・活動の得意・不得意について尋ねたほとんどの項目で、バス通学とそれ以外の児童の回答傾向に明確な差はみられなかった。一方、中学校1・2年生においては、バス通学の生徒はそれ以外の生徒と比べて塾に通わない傾向があるが、学校外での勉強時間、学習に向かう態度、教科・活動の得意・不得意、成績のいずれにおいても、バス以外の生徒との間には明確な差は見られなかった**」と報告している。

(4) 富山市通学区域審議会における意見

■ 気象条件や地理的な条件があるため、一律に定めるのは難しいが、スクールバスであっても、30分以内が苦痛なく通学できる時間なのではないか。
 ■ 国の基準は特に小学生には厳しいと思う。30～40分程度が限度ではないか。中学校は部活動が終わる時間に合わせてスクールバスを運行することが難しいため、できるだけ自転車で通える時間や距離がよいのではないか。
 ■ 保護者の肌感覚は30分以内である。一方、高学年になると、『体力がついていいよ』とプラスの方向に変わる。低学年だけにスクールバスを出すなど柔軟な対応があればよい。